ゲルマン語における子音省略について（2）

Über das Weglassen des Konsonanten im Germanischen (2)

鹿児嶋　繁雄

桐蔭横浜大学法学部

（2010年9月15日　受理）

Resümee:

Dem Duden-Wörtebuch nach soll das Wort „Glied“ aus dem Indogermanischen „*el-“ stammen aber „Glück“ erscheint angeblich erst im Mittelalter.

Die Herkunft des Wortes „Glück“ und „Sklave“ kommt aus dem Lateinischen „claudere“ (schließen) und „clāvis“ (Schloß) . Die Gegenüberstellung von „schließen“ (got. ga-lūkan) und „aufschließen“ (got.us-lukan) wurde im Isländischen gelöst. Daher kommt der Widerspruch zwischen zwei Wörten: engl. „lock“ (Schloß) und nhd. „locker“ (durchlässig, mangelhaftbefestigt).

2．1　„Glied“《四肢》と „Glück“《運》の語源について

語源辞典において „Glied“《四肢》は „g“ のない印欧語（indg.）語根 „el-“《曲がる ,biegen.》を設定。それに対して、現代ドイツ語（nhd）„Glück“ は、現代英語（engl）„luck“《運》と „g“ を欠いた語が並立しているので、（nhd）„Glück“ は „Glied“《四肢》と同じ語形成であるべきだ。しかし語源辞典では（nhd）„Glück“ の語源は不詳と規定されている。

果たしてこの記述は事実であるのか、ゲルマン語最古（4C）の文献ゴート語（got.）から考察する。

2．2　語源辞書の記述：„Glied“

Duden [1]：「中高ドイツ語（mhd）„gelit“, 古高ドイツ語（ahd）„gilid“ は、nhd. において廃語となった共通ゲルマン語 „lid“ ,ahd „lid“ ,got. „liþ“, 古アイスランド語（aisl.）„liðr“ に前綴り „ge“ [2] をつけた造語で、多様に発展・拡張した indg. 語根 „el-“ に属している（nhd.Elle《肘》を参照）。

*lim- は異なる接尾辞をつけた古英語（aengl.）„lim“《四肢》《関節》engl. „limb“《（動物の胴

Shigeo Kagoshima : Department of Law, Faculty of Law, Toin University of Yokohama, 1614 Kurogane-cho, Aoba-ku, Yokohama, Japan 225-8502

体・頭部から）突き出ている部分。腕・脚・ひれ・翼・側脚など。（人間の）四肢》の命名には nhd. „Elle“《肘》„limb“ にとってと同様《曲がること》(Biegung)《身体に隠れているもの》(Geborgenes[am Körper]) という意味から発している。

„Glied“ は Gelenk《関節》だけでなく、Rumpf《胴体》と対立して Arme《腕》Beine《脚》をも表していた。

比喩的な意味で . „Glied“ は Teil eines Ganzen《全体の一部》(特に Sippe《氏族》Mitglied《構成員》‥」

Kluge[3]:「‥ゲルマン語 (germ.) 以外で一番近いのはラテン語 (lat.) „lituus“《卜鳥官の曲柄杖》(Krummstab der Auguren) (図１参照) [4]。

augur dextra manu lituum gestans; ad eius pedes est avis sacra

右手に . „lituus“ をもつ „augur“：足元には聖なる鳥

（図１）

(＜ *litus《屈曲》とトカラ線文字Ａ „let-“, トカラ線文字Ｂ „lait-“《立ち去る》(fortgehen)：ゲルマン語の語幹 „lï-“ に歯音 ([t] [d] [n]) 接尾辞：*leḭ-《動く、曲げる》から発した germ. 語幹 „*lï-“ に „m“ をつけたアングロサクソン (ags) lim,engl.limb,aisl.lim (r), ノルウェー語 lim, デンマーク語 lim, デンマーク語、スエーデン語 lem „Glied“《四肢》, „Mitglied“《構成員》, „Zweig“《枝》‥」

Kluge は、„Glied“ のキーワードの一つを、lat. „lituus“《卜鳥官の曲柄杖》に求めている。Duden との大きな差は、„Glied“ の „g“ が、どこから由来するか不明という点である。一方、Duden が述べる前綴り „ge-“ による造語について Duden は触れていない。

Wasserzieher [5] は、Kluge 派で、„Augurstab“《卜鳥官の曲柄杖》を „Glied“ の核と措定する。「…何故なら „Glied“《四肢》(Fuß《足》、Elle《肘》、Spanne《指尺（親指と小指とを張った長さ、約 20cm》) は、Maß《尺度》として用いられるから。」

Duden は、idg. „*el“ を核に、Kluge,Wasserzieher は、germ. の語幹 „*lï-“ を核に据える。lat. „augur“《卜鳥官》がもつ lat. „lituus“《杖》を „Glied“ の意味 „biegen“《曲がる》の実質的な核に Duden も Kluge 同様据えている。

* 印は、音韻法則上の想定形で、文献に存在する最古の単語は lat. „lituus“《杖》である。lat. „augur“ „lituus“ とはなにか。

Oxford [6] のラテン語辞書によると、「„augur“：占い師、預言者。ローマでは司祭の特別な団体の一員。初期には非常に尊敬されており、稲妻、鳥の鳴き声、飛び方、神聖な鳥が餌を食べる方法を観察することによって未来を占う。」„lituus“ は、Orbis [7] の解説によると、「曲がっ

た卜鳥官の杖で、鳥占いのための境界に定めた清められた場所に印をつける」とある。（図2参照）

（図2）

Wasserzieher が「尺度」（Maß）として用いる、とあるのは „Glied“ の一部である „Fuß“（約 1/3 メートル ,engl. „feet“ 約 30 cm）„Elle“（55 ～ 85 cm）が „lituus“ の範囲を決める役割をもつことに着目し、„Glied“ の個別的な単語の意味にも一致する、ということであるらしい。

いずれにせよ図 2 にあるように、„Glied“ の核心部分が、曲がった杖の部分にあることは Duden の解釈の裏にありそうである。

2．3　„Glied“ と „Glück“

„Glied“ の解釈は、„Glied“ を „g“ と „leid“ に分け、„leid“ の部分を歴史的に遡ると、idg. „*el-“ ＜ germ. „lid“ に至る、ということである。しかし、„g“ のない engl. „luck“ と nhd.„Glück“ が並立しているにもかかわらず、„Glied“ 同様、語源的に „g“ +„lück“ と予測される „Glück“《運》の由来は、Duden では「不明」（dunkel）と規定。Kluge [8] は、中世以降に現れた単語と規定している。「作られたのは非常に遅く中高ドイツ語（mhd.1160 年以降）„（ge）lücke“ で、おそらく古低地フランケン語 „*gilukki“。engl. „luck“ は古フリジア語（afries.）„lukk“, 中世英語、ノルウェー語 „lukka“ „lykka“（女性名詞）。got. 古ザクセン語 „lūkan“, 古北欧語、afries. „lūka“, アングロサクソン語（ags.）„lūcan“,ahd. „lūhhan“《閉じる》は、古代ローマの錠前技術によって „schließen“《閉じる》という意味に交代した。」

古層にある《閉じる》からどのように「運、不運」という対立する意味があらわれたか、という説明は Kluge は不十分である。

英語の語源辞典 [9] では、「おそらくギャンブル用語。中世オランダ語 „ghelucke“ の語頭音消失。『„g“+ 未知の《機嫌・幸福》』。」と、„g（e）“ 音の説明は „Glied“ と同じと規定している。つまり „g“ 音は二次的な音変化と考えている。ドイツ語 „Glück“ と英語 „luck“ は地域差で „g“ は本質的ではないと規定している。

しかし文献から再吟味するとき、上記の語源辞書の記述は正しいのであろうか？

2．4　„ga-lūkan“ と „us-lūkan“

Kluge が „schließen“ として掲げている got. „lūkan“ は、原典では „ga-lukan“ である。got. には „lūkan“ という単語は存在しない。存在するのは „ga-lukan“ か „us-lukan“ である。

got. ルカによる福音書（L.）3,20 anaaiauk jah þata ana alla galauk Iohannen in karkarai.
lat.　同　Adiecit et hoc super omina, et inclusit Ioannem in carcere.
ギリシア語（gr.）*προσεθηκεν και τουτο επι πασι και κατεκλεισεν τον Ιωαννην εν τη φυλακη.*
アイスランド語（is.）・・、að hann varpaði Jóhannesi i fangelsi.
nhd.（Herodes）・・legte zu allem auch noch Johannes gefangen.
（領主ヘロデは）・・自分の行ったあらゆる悪事についてヨハネに責められたので、ヨハネを（牢に）閉じ込めた。

lat. „inclûdere“ は、《1.（箱・袋に）入れる、封入する、しまい込む 2. さし込む、挿入する、含ませる、織り込む 3. 封じ（閉じ）込める、監禁する》

gr. „ *κατακλειω*“ は、《閉じ込める、封入する（ミイラを棺に）》

is. „varpa“ は、《投げる》をそれぞれ意味する。ただし、got. „ga-lukan“ に対応する is. „lûka“ は《閉じる》を意味する。Hûsit var lokit î lâs .《家は閉じられていた。》(10)

got. „ga-lukan“ は、lat. „inclûdere“ と対応しているのではなく、lat. „claudere“《1. 締める、閉じる 2. 囲む、閉鎖する、封じ込む、包囲する 3. 堰き止める、阻止する 4. 終わらせる》の借用なのではないか？

lat „d“ は、got. „k (q) “ に対応する。

lat.	illudere《からかう》	includere《封入する》	nudus《裸の》
got.	(bi) laikan	(ga) lukan	naqaths

got. „ga-lūkan“ の „ū“ は lat. „claudere“ の „au“ の代替延長。

lat. . „claudere“ は、《開いているものを閉める、閉じる、（錠・掛け金・かんぬきをかけて）閉める》という意味だ。Oxford 辞典の最初の例文は、Caesar,bellum civile から抜粋されている。

「Conventus portes Varroni clausit　巡回裁判はヴァロー家の門を閉める」とあるように「門を閉じる」が第一の意味である。lat.„inclûdere“ と got. „ga-lûkan“ を対比して、got. „ga-lūkan“ の意味・系統を考えると、誤った方向に向かう。つまり、lat.„includere“ の „in-“ を取り除いた „cludere=claudere の異形“《閉じる》と got. „ga-lūkan“ の意味は一致するが、„ga-“ は lat. の „in-“ と同じように前綴りと考え文献には存在しない „lūkan“ を当て嵌めて解釈しているのが Kluge である。

got. „ga-lūkan“ と対立するのは „us-lūkan“ である。

got. L．4,17 Jah atgibans vesun imma bokos Eisaeiins praufetus, jah uslukands þos bokos bigat stad,þarei vas gamelid.
lat.　同　Et traditis est illi Liber Isaiae prophetae. Et ut revolvit librum, invenit locum ubi scriptum erat.
nhd.　同　Da ward ihm das Buch des Propheten Jesaja gerichtet. Und da er das Buch auftat, fand er die Stelle, da geschrieben steht.
預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のようにかかれてある個所が目に留った。

Is.　　同　Hann lauk upp bókinn og fann staðinn, þar sem ritað er:
　　lauk ＜ lúka《閉じる》lúka upp《開く》

Is. lúka upp《開く》の upp を省略した lúka からは、nhd „locker“《(結び目が) ゆるんだ、気楽に》が派生した。„-er“ は「bitter《にがい》、lauter《純粋な、ただ…だけ》、munter《目ざめた、活発な》の „-er“ をまねた造語」[11]。

2．5　„Sklave“《奴隷》と „galūkan“《閉める》

„galūkan“《閉じる》と „uslūkan“《開ける》の got. の対立は、is. „lúka“《閉じる》と lúka upp《開く》の対立に見られるように „ga“ は弱化した。現代語においても engl. の „g“„k“ 音は弱化する。

engl. „gnome“ [noum]《地の精、金言》対 nhd. „Gnom“ [gnóm]《地の精》、„Gnome“ [gnómə]《engl. „Gnosticism“ [nástiszəm]《グノーシス主義》対 nhd. „Gnostizismus“ [gnɔstitsísmʊs]《グノーシス主義》。engl. „knot“ [nat | not]《結び目》対 nhd.Knoten[knó:tən]。

„ga“ の弱化した is.„lūka“《閉じる》から engl. „lock“《錠》„luck“《運》、„ga“ の弱化しなかった „galūkan“《閉じる》からは nhd. „Glücke“《運》が派生した。

さらに、《奴隷》をあらわす engl. „slave“ と nhd. „Sklave“ の差異 „k“ は、„ga“ の弱化の有無によって説明できる。„galūkan“《閉じる》は、lat. „claudere“ から派生した。lat. „claudere“ から派生した „clâvis“《錠》からは、„s“ を添加した got. „skalks“《奴隷》が派生した。この „s“ は lat. „servus“《奴隷》の „s“ か？

Kluge[12] が述べるように、「„Sklave“ は、6Cのスラブ語 „sklábos“」でも「《スラブ民族》„Slawe“ の民族名称」でもない。

got. は „skalks“,ahd. は „scalc“ である。

got.R.14,4（ローマ信徒への手紙）　þu hvas is, þuei stojis framaþjana skalk?
lat.R.14,4　　tu quis es, qui iudicas alienum servum?
nhd. 同　　Wer bist du, daß du einen fremden Knecht richtest?
　　他人の召使を裁くとは、いったいあなたは何者ですか？

ahd.Tatian 44,16（マタイによる福音書）
　Nist iungiro ubár meistar noh scalc ubár sinan heron.
　lat.Non est discipulus super magistrum neque servus
　　弟子は師にまさるものではなく、僕（しもべ）は主人にまさるものではない。

2．6　got. „galūkan“《閉じる》から派生した ahd. „glucke“, nhd. „Glück“《運》および ahd. „scalc“ ,nhd. „Sklave“《奴隷》は、以下のような関連があるのではないか？　タキトゥス『ゲルマーニア』[13] 24《社交・遊楽》には、ゲルマン人の間に博打で負けると自ら奴隷となる風習があったという。

「‥彼らはこの賭博を、酔っていないときも、あたかも真摯な仕事であるように行い、しかもすべてを失った場合、最終最後の一躍に、みずからの自由、みずからの身柄を賭けても争うほどの、勝負にたいする無謀さである。負ければ、進んで他者の奴隷となり…」

さらに、当時のローマの奴隷の扱いは 25《奴隷》にあるように、錠で鎖につながれた状態であった。「‥鞭うち、鎖につなぎ、課役の罰を加える。(vinculis coercere：vinculis ＜ „vinculum“《足を縛るなわ・鎖、手かせ、足かせ》coercere《閉じ込める》《mit Gefägnis ‥ zu bestrafen》)」

„Glück“ が現代「良い運、幸福」の意味に用いられるのは、「意味の良化」作用が働いたのではないか？　engl. „queen“《女王》は、本来 gr. „γυνή“《女》の意味であった。

註

(1) Duden: Herkunftswörterbuch,Mannheim 1963

(2) 「got. の ga-,ahd.gi- は、ラテン語（lat.）cum《1.（同伴・仲間の意味）・・と、と共に、と一緒に 2.（同時の意味）・・と同時に、するやいなや 3.（状態・方法・手段の意味）・・をもって、の中で、のために》と意味、用法において一致する。またギリシア語（gr.）συν《・・とともに》とも一致する。」(Hirt,H. Handbuch des Urgermanischen II S.127 Heidelberg, 1932)

(3) Kluge, Fr. : Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache, Berlin 1975

(4) Orbus pictus latinus　München, 1976

(5) Wasserzieher, E. : Woher? Ableitendes Wörterbuch der deutschen Sprache,　Bonn 1974

(6) A Latin Dictionary, Oxford 1969

(7) Orbis. ibid

(8) Kluge,Fr. : ibid

(9) The Oxford Dictionary of English Etymology Oxford 1996

(10) Baetke,W. Wörterbuch zur altnordischen Prosaliteratur Darmstadt 1976

(11) Etymologisches Wörterbuch des Deutschen (Berlin 1989)

(12) Kluge, Fr. : ibid

(13) Tacitus, germania Düsseldorf 2001、『ゲルマーニア』東京　1979